

## 西大寺旧境内食堂院の調査 平城第404次)

調査区は、平城京右京一条三坊八坪にあたり、764(天平宝字8)年孝謙太上天皇(後の称徳天皇)によって発願された西大寺の北東隅部の食堂院じきどうに推定されています。これまでの西大寺食堂院に関連する調査では、食堂と思われる建物や西三坊坊間東小路西側溝、南北に延びる埋甕遺構うめがめなどが検出されていますが、多くの部分は未発掘であり、食堂院の範囲や、建物の規模などはわかっていませんでした。今回の調査は、その範囲の北西部分にあたり、食堂院に関する新たな遺構の検出が期待されました。

調査は5月末に開始し、梅雨のシーズンにもかかわらず天候に恵まれ、順調に進みました。6月末に一般公開をおこない、約600名もの方に見ていただくことができました。調査は8月末に終了しました。

検出した主な遺構は、東西棟建物2棟、埋甕遺構などがあり、いずれも奈良時代後半、西大寺創建期と考えられます。南北に並ぶ2棟の建物はいずれも礎石建ての建物です。南側の建物の礎石据え付けの掘形は隅丸方形で、一辺が約2mもありました。北側の建物は礎石を据えるための根石を残すものが多く、基壇外装の痕跡と思われる溝も検出しています。さらに、これらの建物は、廊で接続していることもわかりました。

今回発掘した埋甕遺構は、以前奈良市教育委員会が発出した埋甕の続きと考えられ、それらを合わせると、東西4列、南北20列、合計で80基もの甕が並べられていたと考えられます。甕の内部には、おそらく味噌や酢などの食品を貯蔵していたのでしょう。食堂院内に大規模な貯蔵施設が備えられていたことがわかりました。

遺物は、多種多様なものが出土しています。土器は、奈良時代から平安時代前期のものが中心で、土師器、須恵器、施釉陶器などを含んでいます。特に、調査区西側では製塩土器がまとまって出土しました。奈良二彩の盤や鉢も比較的多くみつかっています。その他、奈良時代後半の西大寺所用の軒瓦や、凝灰岩、金属製品なども出土しています。

創建当時の西大寺については、『西大寺資財流記帳』という史料に詳しく書かれています。それによると、食堂院には食堂、檜皮殿おおい、大炊殿、厨、倉などの建物があったことがわかります。今回検出した2棟の建物は、これらのいずれかに相当すると思わ

れます。さらに貯蔵施設や井戸といった、食堂院に必要な施設も検出されており、今後、創建期の西大寺食堂院について、さらには南都の古代寺院の研究をすすめる上で、重要な成果を得ることができました。(都城発掘調査部 大林 潤)



調査区全景 北西から)